

姉に飼われることになりました！

雨宮照

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「てっは、お姉ちゃんのペットになるの!」

高校進学のため、実家を離れて暮らすことになった主人公、神楽坂虎徹。

彼が引越すことになった場所は、なんと実の姉である神楽坂愛の部屋だった!

部屋でのルールを決めるとき、愛は虎徹に「ペットになること」を提案する。

果たしてこの姉弟、なんの問題もなく暮らしていけるのか!

# 目次

二人暮らしになりました！	—	1
姉がいたずらしてきます！	—	6
姉がお風呂に入っています！	—	11



二人暮らしになりました！

「な、無い……！」

数多の数字が羅列してあるその前で、僕は頭を抱えて膝をついた。

左手に握りしめた受験票に記載されている数字を、もう一度確認する。

そして神に祈る天使みたいなポーズで、数字の羅列を目でなぞって……また、項垂れた。

そう、僕はこの瞬間、第一志望校の不合格が確定した。

そして、適当に受験した滑り止めの私立高校へと進学することが決定してしまったのである。

とぼとぼと、ゾンビみたいに生氣のない顔、生氣のない足取りで家路を辿る。

玄関を開けると、出迎えた母が暖かいココアを淹れてくれた。

すつと一口啜ると、身体が芯から暖まる。

それと同時に、自分の体が今までどれほど冷たかったのかを意識する結果となった。

「じゃあ、あれね」

母は僕の結果を聴くと、遠くを見るように言った。

寂しそうに、それでも少し嬉しそうに続ける。

「てつは、お姉ちゃんと一緒に住むのね」

それは、これまで第一志望校への進学しか頭になかった僕にとつて、初めて耳にする情報だった。

「つてなわけでお姉ちゃん、これからお世話になります」

「お断りします」

「なんで!」

卒業式のあと、荷物をまとめてお姉ちゃんのところへやってきたんだけど……なんかいきなり拒否されました。

「だってさあ、考えてもみてよ。ここは昨日までわたしのお城だったのに。てつが越してきたら窮屈になっちゃうじゃん」

「そういわれても……」

そう言われたつてどうしたらいいか分からない。

四月から通うことになった学校まで、家からは電車で三時間。

お姉ちゃんの家からは電車で二十分なのだ。

ここに住まわせてもらえなければ、僕は路頭に迷ってしまう。

考えてたら、だんだん涙目になってきちゃった……。

「あ！ 泣かないで！ 冗談、冗談だから！」

「……………いじわる」

こんなふうには、お姉ちゃんはいつも僕をいじつてくる。

その都度、僕はお姉ちゃんに弄ばれているのだ。

「でもさ、てつ。この状況って、なかなか普通じゃないよ」

「んー、僕もそう思う」

「考えてもみてよ。女子大生と男子高校生が二人で暮らしてるって、普通じゃないよ？」

……………確かに、なんか危険な香りがする！

ひとり暮らしのお姉ちゃんのとこに居候する弟シチュエーションって……………エロ同人でしかみたことない！

「……………ねえ、なんでそこで顔真っ赤にするのバカ」

「いてっ」

想像してたら、お姉ちゃんに小突かれてしまった。

「とりあえず荷物はそこに置いてね。置いたら、この家でのルールを取り決めるよ」

「そうだね、二人暮らしにルールは大切だもんね！」

荷物を置いて、部屋の中央のちゃぶ台を挟んで向かい合う。

改めて見てみると、絨毯はピンク色の毛が気持ちいい柔らかい素材で、木材そのまま

の色のベッドの上では、雪だるまのイラストが描かれたもこもこの布団とぬいぐるみ達  
が並んでこつちを見ている。

……どうも、女の子の部屋を意識してしまつて落ち着かない。

「じゃあ、ルール決めよ」

それから、掃除の担当やご飯のことなど、これから生活していく上でのルールを二人  
で話し合つた。

ここまでは順調だった。

「ねー、てつ？ お姉ちゃんさ、もういつこだけルールをつくりたいんだけど、いいかな  
？」

「んー、なに？」

「てつは、お姉ちゃんのペットになるの！」

ぶふおつ。

「今なんて!？」

「だーかーら。てつは、お姉ちゃんのペットになるの！」

「ど、どういふことなのそれは！」

何言い出したのこの姉!

僕がお姉ちゃんのペット?



ってことは、色んな命令を聞いたり、色々と躡られちゃうってこと……？

「ねー、てつ〜」

「ぐ、ぐぬぬ……」

そんなことって……、そんなことって、あんまりだよ。

だって、これから一緒に暮らしていくんだよ？

なのに、明確な上下関係とか、服従とか、そういうのってないよ。

さすがにこのときは、僕だって怒った。

怒って口から出た言葉は……。

「……………ん」

「ん？ なぁに、てつ？」

「……………わんっ」

「よく出来ました♡」

よりもよって、ペットの鳴き声だった！

続く

姉がいたずらしてきます!

「んっ……、……うん？」

朝起きると、目の前は見知らぬ天井だった。

僕の部屋とは違う、白いLEDのついたこれまた白の綺麗な天井。

……そういえば、今日からお姉ちゃんの家につ越したんだっけ。

時計を見ると、時刻は朝の六時。

昨日は疲れて、お風呂にも入らずに寝てしまったみたいだ。

疲れていたから、起こさないでいてくれたお姉ちゃんには感謝しないとね。

と、頭を上げたその時だった。

「は、はあっ!?!」

僕は、素っ頓狂な断末魔を上げた。

理由なんて、一言で説明がつく。

……僕は、服を着ていなかったんだ。

辺りを見回して、僕がお姉ちゃんのベッドで寝かされていたことを知る。

お姉ちゃんのベッドで、生まれたままの姿の僕。

これはまずい、何があったとキヨロキヨロすると……なんと、同じベッドでお姉ちゃんが寝ているではないか。

「ちよつと！ お姉ちゃんっ！」

僕は、目をぼつてんにしてお姉ちゃんが被っている布団をひつぺがす。

すると、そこには……ふわっふわな身体を隠しもしない、お姉ちゃんの姿があった。

「……んっ……んっ……、てつう？」

「てつう？ じゃないよ！ なにこれ、事後なの？ ねえ事後なの!？」

「えへへへ、さてね。てつはどっちだと思うっ？」

「してないよ！ してないと思いたいよ！」

「ふふ、教えな〜い」

「なんで！ さすがにしないよね！」

「ペットに教えるわけないじゃ〜ん」

朝から、お姉ちゃんはからかってくる。

後から聞いたら、僕が寝ちやつたから起こさないように洗濯物を洗っておいてくれたらしい。

本当、こういうところがお姉ちゃんは魅力的だ。

「でも、お姉ちゃんはなんで僕をペットにしようとなんて思ったの?」

目下最大の疑問を口にする。

「んー。だって、てつって犬っぽくない?」

「い、犬っぽい?」

「だって名前も神楽坂虎徹って、犬っぽい名前だし。昔からわたしが行くところ行くところ尻尾振って着いてきてたじゃん!」

うつ……確かに名前は自分でも犬っぽいと思ってたけど!

「だからほら、わんちゃんみたいに吠えてみてよ。ほら」

「……………がるるる」

「もつとかわいく♡」

「……………くううん」

「そうそうよく出来ました」

僕が言われた通りにすると、お姉ちゃんが頭を撫でてくれる。

僕は二日目にして既に、若干この主従のシステムに慣れ始めてしまっていた。

っていうかなにこれ、あれなの?

実はすごく理にかなってる考えかただったたりしない?

お姉ちゃんは僕に命令して嬉しいし、僕はお姉ちゃんに褒められて嬉しい。

全国の姉弟はみんなこれをやるべきだっけくらいに理にかなってゐる気がする。

「じゃあ、お姉ちゃんもうちよつと寝るね！」

「……えっ」

そう言うのと、お姉ちゃんはまた布団にくるまってかわいい寝息をたて始めた。

「すう……すう……」

「まったく、お姉ちゃんは……」

「すう……すう……ちらっ」

待って、今見えちゃったんだけど。

お姉ちゃん寝たふりして僕のことちらちら見てる！

なに、これはどういうことなの！

「……ちらっ……ちらっ」

ねえすごい見えてくる！

お姉ちゃんは僕にどうして欲しいの！

「……ちらっ……ねえてっ！」

「うわっ、びっくりした！」

僕がお姉ちゃんの意図を図りかねてると、お姉ちゃんが急に飛び起きた！

「ねえ、てっ……」

「な、なに?」

「どうして、裸のお姉ちゃんが隣に寝てるのに襲ってくれないの?」

「え……?」

お姉ちゃん、襲われるの待ってたの……?」

お姉ちゃんと、二人暮らして無防備すぎるなって、思ってたんだよ。

これって、本当に襲ってもいいのかな。

でも、姉弟だし……でもでも、やっぱり裸のお姉ちゃんを前にすると、興奮が抑えられない!

なんて、悩みながらお姉ちゃんの方を再度向く。

すると。

「すぴー、すぴー」

今度は寝たふりじゃなく、本当に寝息を立てて寝ているお姉ちゃんがいた。

……ほんと、お姉ちゃんは勝手なご主人様だ。

続く

姉がお風呂に入っています！

お姉ちゃんが、お風呂に入っている。

僕が作ったオムライスを夕食に二人で食べて、食べたら一緒にゲームして。

レースゲームでどっちが先にお風呂に入るか決めて、僕が負けた。

だから、今お姉ちゃんはお風呂に入っている。

お姉ちゃんの家は一人暮らしを始めるときにセパレート型にこだわったらしく、お風呂とトイレが別だ。

……それに、お風呂がすごく豪華。

ワンルームのアパートとは思えない、脱衣所がきちんとあるお風呂だ。

とはいっても、やっぱりワンルーム。

お姉ちゃんがお風呂に入ってる音が、こたつに入ってる僕のところにも聞こえてくる。

ちやぷん……ちやぷん……つて。

……だめだ、興奮してきた。

意識しないようにゲームを試みるけど、どうしても頭から離れない。

お姉ちゃんがお風呂に入っていると、想像してしまう。

「お姉ちゃん……」

……ちよつとだけなら、いいよね！

僕はゲームの画面をポーズにして立ち上がると、お風呂のある玄関の廊下へ出た。

だんだんと近づいてくるお風呂の音が、僕の心臓の鼓動に掻き消される。

ドクドクとうるさい心臓を押さえつけて、脱衣所に足を踏み入れる。

すると、まず目に飛び込んで来たのはお姉ちゃんの下着。

……普段のからかうような言動からはかけ離れた水色の清楚な下着に、僕の興奮は最高潮に達した。

……もう、脳は沸騰して噴火寸前。

でも、僕はそんな事じゃ止まらない！

深呼吸して、下着に手を伸ばす。

……すると、ざらざらとした下着の生地が心地よかった。

それを掴んで近くに引き寄せると、ふわりとお姉ちゃんが香る。

その匂いに、僕の頭はくらくらして、意識が飛びそうになってしまった。

……じーっと、見つめて。

ブラの真ん中についているリボンを触つてみたり、胸に当たる部分に鼻を当てて嗅い



でみたり。

色々、思いつく限りのことを全部やってみた。

「……………はっ！」

……………ふと我に返ると、随分長いことこうしていたことに気が付く。

お姉ちゃん以外には誰もいないことが分かりきっていても、キョロキョロと周りを見回してしまう。

そして、再度お風呂のすりガラスに目を向けたときだった。

「……………みーちゃった♡」

「……………ビクウ!!」

お姉ちゃんが戸を少しだけ開けて、僕を見ていた。

「お、お姉ちゃん……………これは……………」

「ふふーん……………変態っ」

お姉ちゃんは、戸から手だけを出してデコピンしてきた。

「なにしてたの？」

お姉ちゃんが、聞いてくる。

「え、えと……………ええと……………」

「ま、いいよ。お姉ちゃんも楽しませてもらったから」

「…………え？」

お姉ちゃんは、僕のなにを楽しんだというんだろう。

僕は、お姉ちゃんの下着を見てただけなのに…………。

「お姉ちゃんも、楽しませてもらったから…………変態観測♡」

「変態観測！」

お姉ちゃんは、天体観測ならぬ変態観測とやらを楽しんでいたらしい。

その後は、お風呂から出て着替えたお姉ちゃんにちゃんと謝って、僕もお風呂に入  
た。

そして、寝るとき。

「…………てつ、お風呂のときのアレ…………、一個だけ言うこと聞いてくれたら許してあげる」

「な、なに…………？」

何を言われるんだろう。

…………正直これは、何を頼まれても嫌とはいえない。

それ程のことをしたんだ。

…………でもお姉ちゃんが要求してきたのは、想像より全然単純なことだった。

「てつ…………。ずっと、お姉ちゃんと一緒に寝てね♡」

「…………う、うんっ！」

……このとき、僕はお姉ちゃんの要求に安堵すると共に、喜びを覚えたのだった。

続く